

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU!

無料

第100号

毎月発行

発行 2020年(令和2年)9月16日 水曜日

2020年(令和2年)9月16日 水曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、66歳、新人の歴史ドキュメンタリー作家。現在、日本刀の真のルーツを発掘した映像【鬼がつくった日本刀】を上映計画中だが、新型コロナウイルスによる延期を余儀なくされている。趣味は古代史・縄文文化研究。埋もれた歴史を掘り起こすことと東北から日本を変えることを標榜。



当新聞100号の到達記念号 次号より新聞名変更—【東北再興】へ 初心に立ち返る一方、活動範囲拡大を目指す

ついに当新聞が 一〇〇号発行

発刊当初は、一〇号までたどり着くことはむずかしいだろうと覚悟していた。勢いだけでスタートし、十分な準備がなかったことで、実際に三号あたりで新聞企画に立ち往生して、発行継続に赤信号が点灯し、非常に苦しくなって放り出そうとしたこともあった。そんな出だしのつまずきにもかかわらず、一〇〇号にたどり着いたのは奇跡というより他はない。

東日本大震災、すなわち「東北大震災」が発端

当然ながら、新聞発刊の動機は東日本大震災、すなわち、筆者が特別に名づける「東北大震災」である。あの大震災は一生忘れることができない。特に、大地震と大津波の後に起きた「福島第一原発爆発」は忘れられない。あの映像を見て、大震災で打ちひしがれていた関係者の心が、絶望に変わっていくのを感じた。筆者は忘れっぽい己を信用せず、震災発生から約半年間、一日も休まず、日々刻々変化する被災地の状況や復興状況、福島第一原発関連ニュース等を、震災発生当時の映像とともに深夜のテレビで見続けた。ほぼ毎日徹夜で、二時ぐらいまで見続けた。サラリーマン生活をしながらだったので、半年間の寝不足状態が続いた。目にも、脳にもしつかり震災映像と関連ニュースを

【東北独立】出版

半年間の震災映像視聴を終えて取り組んだのは、テレビ視聴の半年間をかけて構想を練ってきた【東北独立】という書籍の執筆と出版であった。

自前の出版社は、震災のはるか以前に立ち上げていたので、これ以上ないというくらい低コストでの出版だった。

販売費用もできる限り低コストで済むように、自分ひとりで宮城県内の書店に自ら出向き売り込んだ。取引条件交渉、出荷作業も一人で行った。「大量返品処理」も一人で行った。

【東北独立】が目指したもの

書籍の内容は、政府主導での東北復興はほぼ無理であり、もともと衰退している東北は、復興遅れにより

さらなる衰退を余儀なくされる、だから、東北が持続し、かつての輝きを取り戻すには、政府の干渉から【独立】しての復興しかない。そうした内容を細かなデータも踏まえて書き上げた。いまでも基本的な考え方に揺るぎはない。

ただし、【独立】の実現ルートは、執筆当時よりさらに多様化している。また、ネーミングにもこだわらない。実質的に【独立】を実現できればよいと考えている。

東北が独立すると聞いて驚く人もいるかもしれないが、驚くにはあたらない。沖繩のひとたちに聞いてみるとよい。かなりの割合の人たちが、可能ならば「日本から独立」したがっている。

筆者も、若い女性から直接聞いたことがある。長々と【独立】できるという説明を受けたことがあるのだ。沖繩にそうした考え方があんならば、東北にあっても少しもおかしくない。

【東北独立】の仲間たち

【東北独立】の出版を終えて一息ついてから、ネットで【東北独立】を検索してみた。

どれほどの人がこのテーマに興味があるのか知りたかったこと、またこのテーマはどれほどの広がりを持つテーマなのかを知りたかったからである。このテ

新聞創刊の意義

この電子タブロイド新聞は、紙面数もたったの九ページの超ミニ新聞である。取り上げる情報も限られており、とても偉そうなことは言えない。新聞発行にはまったく門外漢の人間たちが、ほとんどお金をかけずに、無料の新聞を毎月継続して発行することを目的に考え出した方法である。

それでもこの新聞の存在意義を引き出すとすれば、誰も言えないこと、言わなければならないのに言わないことを、遠慮なく真正面からズバリと発言することだろうと確信している。

最近、世論と言われるものが、本当に自分のなかにあるものなのか確信が持たなくなってきた状況があるが、この新聞を通じて、自分たちなりの「世論」だと信じるものを確信をもって発信し続けて行きたいと考えている。

この新聞が続く限り、こうした発刊姿勢をどこまでも保持しようと思つ



新聞発刊前に出版した書籍

「ママに興味を持つ人はごく少数ではあるが存在していたのだ。」

どんな人たちなのか、実際に会ってみたくなり、連絡を取ってみた。

そして出会ったのが、今も寄稿してくれている大友氏とその仲間だった。

三人集めてもらったが、全員初対面で、共通しているのは【東北独立】というテーマに興味があることのみ。

恐る恐る話を始めたが、意外にも談論風発、とても刺激的で面白かった。

いよいよ当新聞発刊

その後、せっかく知り合っただし、具体的な活動を通して定期的に会おうということ、筆者から、いまの電子新聞の形態を提案したという話につながる。

こままでが長い長い前段であったが、ここでようやく新聞発刊につながる。

第一号発行が二〇二二年六月十六日。足掛け九年、満八年四か月。

短いようで長く感じるし、逆にも感じる。

今般の記事執筆にあたり、第一号記載の新聞発行宣言を久しぶりに見た。

今より八歳若くて、文章は固いが勢いのある文章であるが、あらためて読んでみて、初心を思い起こした。

東北の歴史を遡る

東北の復興を考え、それ以前の東北の衰退を考える

と、どうしても歴史を遡らざるを得ない。

いつたい、この流れはどこから始まったのかを知らなければ、有効な手も打てない。

先の昭和の戦争前後、明治維新前後、特に「奥州列藩同盟」の崩壊とその後の政府による東北いじめが最初なのか。

いやそうではない。江戸時代も通り越して、奈良・平安時代。

もつと遡って、弥生時代、縄文時代。

東北の「原点」はどこにあるのか。

負け続け、転がるような衰退を続ける東北は「復興の原点」にはなれない。

それでは、転げ落ちるだけで、明るい未来もないということになる。

輝かしい東北の時代はなかったのかを考えながら、歴史を遡る作業を続けた。

そこで行き当たったのが、いまから千三百年前の東北大転換の時代である。

大和朝廷による侵略と略奪によって、東北の衰退が始まった時代である。

この時代を起点に、東北は、事あるごとに略奪され続け、長期の衰退を開始したのだ。

東北の文化探索

原点探しという点では、歴史と同時に、東北の文化も探索した。

インフラだけを復旧したところで「復興」とは呼べ

ないし、文化なき「復興」は意味がない。

文化の復興も絶対に必要である。

そうしたアングルから、東北にいまある郷土芸能を入り口にして探索を開始した。

津波で流された獅子頭をきつかけにして、衣食住もままならない被災地で郷土芸能がいくつも復活した。

それほどに郷土芸能が、東北被災地の生活に深く根付いていることがあらためて分かったのだ。

それまでは、郷土芸能はあまりにもローカルすぎて、研究者もよく理解していなかったことも判明した。

大震災時にも平静さを失わない東北人の心情に、郷土芸能と共通する何かがあることに気が付いたのだ。

その淵源はさらなる探求が必要だが、未開拓のエリアである。

新聞活動のすそ野拡大

当新聞の目的は「東北復興」であるから、新聞発行だけに活動を絞る必要もない。

それどころか、どんどんすそ野を拡大していくべきだと考えている。

そこで最初に始めたのが、三陸被災地の海鮮と東北地酒の消費を東京圏で行うということだった。

東北を応援したいが、東北に向くのもかなりの負担になる。そこで、東北に向かな

くとも、東京圏に居ながらにして、三陸の海鮮と東北地酒を消費する会を定期的に開催して、「間接的に」

支援する活動を思いついた。名づけて「三陸酒海鮮会」。

初回は二〇一三年四月二十七日。

渋谷の居酒屋さんの絶大なご協力のもと、お店が満杯になるほどの人々が駆けつけてくれた。

その会は、コロナ禍で中断しているが、いまも継続中である。

参加メンバーも多士済々。この会をきっかけに東北に興味を持つていただいた方々も数知れない。

また、この会のおかげで、東北の地酒にはかなり詳しくなった。

東北の埋もれた歴史発掘と映像化に進出

最初から大上段に構えて、東北の埋もれた歴史を発掘して、それを映像化しようと考えたわけではない。

たまたま、筆者の故郷の紹介用動画の非常に短いバージョンを作成しようというところから、映像化事業は始まった。

とはいえ、筆者は、この分野はまったくの素人であり、何をどうすればよいかまったく見当もつかなかった。

何とか知り合いのつてを頼って、動画制作に着手した。

生涯初の映像作品。大胆にカットしなければ人に見

せる動画にはならないのだが、それが出来ずに、長さだけは「大作」となってしまう。

そんな作品からスタートしたが、二作目の「鬼がつくった日本刀」は、前回の反省を生かして、視聴者からも前作より大進歩したとの評価をいただけるまでに改善した。

日本刀のルーツは古代東北にありとの主題を中心とした歴史ドキュメンタリー風の映像に何とか仕上がった。

また、従来の日本刀の定説に真っ向から立ち向かい、東北の悲しい歴史を浮かび上がらせる作品になったのではないかと思う。

今月末には、撮影地の大崎市での上映がある。地元の人々に披露できることが何よりうれしい。

そして、いま三作目に取り組んでいる。

これも古代東北の製鉄にまつわる主題を中心に展開する映像である。

素人発想をどこまでも貫いて、既存の型枠を飛び出す作品になることだろう。

次のすそ野拡大プラン

新聞発行とともに、そのすそ野を形成する活動として、これまで、東北被災地支援イベント企画と実行、

東北の歴史探索、東北の文化探求、そして東北の埋もれた歴史発掘とその映像化と進んできた。

しかし、まだやりつくし

た感じがしていない。

そこで、次の展開の検討を開始した。

具体的にはこれからであるが、方向としては、まずは東北の経済活性化の一助を担いたいということで、

東北での一風変わった起業支援活動を検討している。

もうひとつの企画としては、東北の政治ということも考えてみたいと思っ

ている。

何も自らが政界進出をするということではない。生活に密着した政治活動である。

しかし、東北独自の政治活動があるのとならないのでは、考え方も大きく異なってくるだろう。

それに挑戦してみたいのである。

一〇一号からは「東北再興」と名称変更

これまで「東北復興」という名称で新聞を発行してきたが、一〇〇号発行を機に、名称を「東北再興」と改めることとした。「復興」

フェーズから「再興」模索へと切り替えたいからである。

千三百年前の東北に立ち戻り、そこから、二十世紀の「東北再興」を本気で目指したいと考えている。

「鬼がつくった日本刀」

約千三百年前、東北の地から全国に連れ去られた多くの奥州刀鍛冶たちがいた。しかし「鬼」と蔑まれ、苛酷な労働を強いられながらも、数々の名刀をつくり続けた。だが古代から中世にかけての日本刀の名工といわれた刀工のほとんどが奥州刀鍛冶の流れを汲んでいたにもかかわらず、その後すっかり忘れ去られてしまった。



埋もれた歴史を発掘するドキュメンタリー【鬼がつくった日本刀】・・・9/26・宮城県大崎市上映予定



第73回

水産業再興のための 料理レシピ紹介

【鮭とキノコの南蛮 漬け】



郷土料理愛好家
松本由美子氏

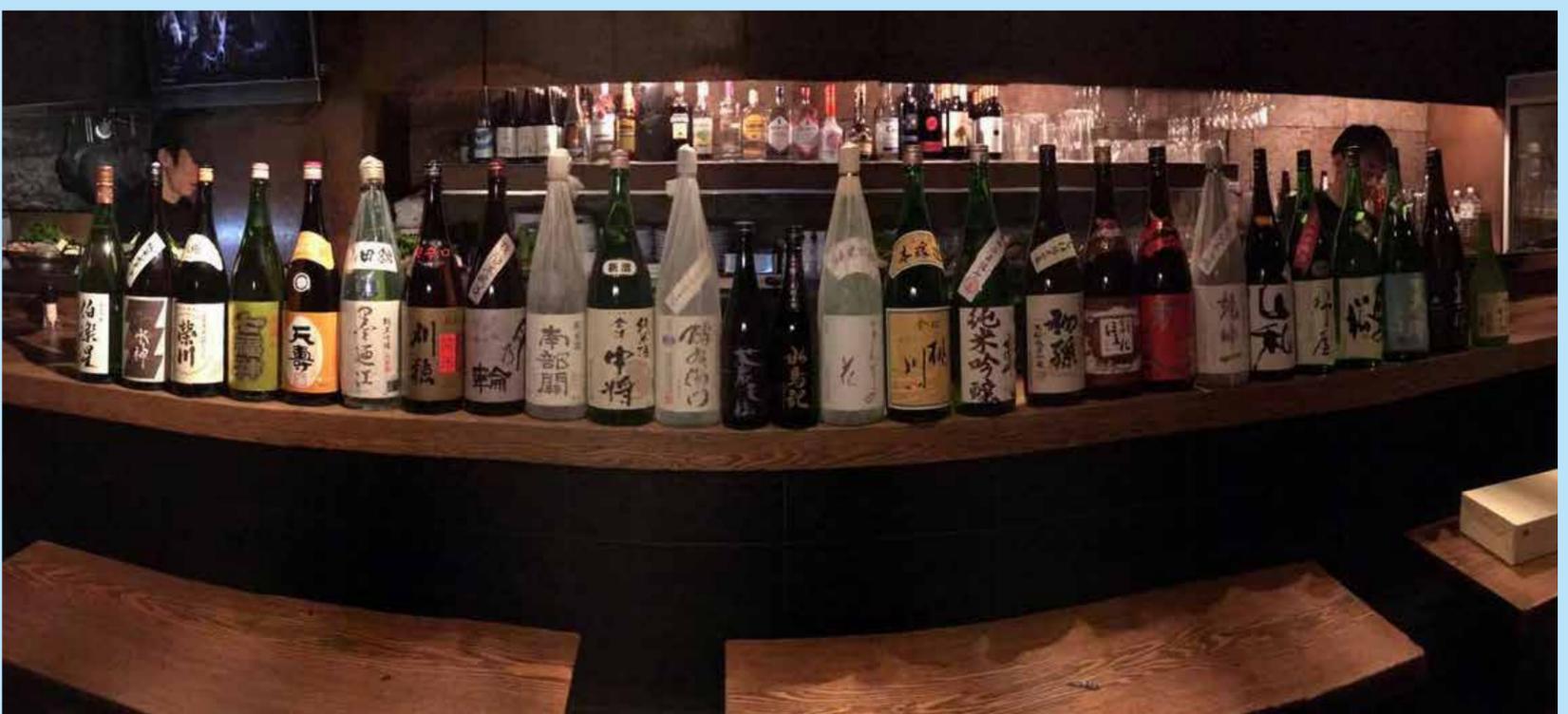
一材料一 鮭2切れ、ぶなしめじ1/2袋、玉ねぎ1/2個、えのき茸1/2袋、レモン1/4(ポッカレモンでも 適量)、塩少々、小麦粉適量、だし汁100CC、醤油大3、みりん大2、酢大2、砂糖 大1/3

一作り方一 ①玉ねぎは薄切り、レモンいちょ切りにしボウルに入れ、調味料に入れて下味をつけておきます。②鮭は食べやすい大きさに切り、塩ふり4~5分おいたあとペーパータオルで拭き小麦粉をまぶし、しめじとえのき茸は石づきを取って洗っておく。③フライパンにオリーブ油を大2を入れ鮭をこんがり焼いてタレに漬けておきます。同じフライパンでしめじとえのき茸をしんなりするまで炒めて鮭と一緒にタレに漬けておきます。さっくり混ぜ、1時間程度漬けます。

もうそろそろ再開、再会できるかな？ 東北地酒！飲みたい、呑みたい・・・！

【依然として第43回三陸酒海鮮会代替日程未定のまま】

3月14日開催のはずだった第43回目の三陸酒海鮮会から、すでに半年も経ちましたが、依然として代替日程が未定のまま推移しております。美味しい東北地酒への恋しさが狂おしいほどに募っております。しかし、みなさま、そろそろ解禁の気配がいたします！それまでは以前の写真画像のみで何とか耐えてください。また、宅飲みでガマンしてください。再びお会いできる日を楽しみに！



写真でお伝えする
東北の風景

新型コロナ禍
自粛症候群
「対応薬④」

写真撮影

尾崎匠



安倍首相の辞任に 寄せて

祝！創刊一〇〇号

まず始めにお祝いを申し上げたい。この「東北復興」紙、今回で実に一〇〇号である。二〇一二年六月の創刊以来、一度も欠かすことなく、遅れることもなく、毎月一六日には必ずこの「東北復興」紙を刊行し続けてきた編集長の砂越氏には、心からの敬意を表したい。毎回様々な切り口から東北について提言を行っている砂越氏の構想力、発信力には素晴らしいものがあると思う。これからも要注目である。

この「東北復興」紙が生まれるきっかけとなった震災の発生から、来年の三月一日でちょうど一〇年になる。一〇年が区切りや節目のように見えるのは、単に一〇という数字で世の中の様々なことが区切られるというだけのことであり、そのことと実際の復興の進

み具合との間に直接の関係はない。

より端的に言えば、震災の発生から今に至る時間の経過の中で、一区切りついたことも到底区切りなどついていないこともあり、それらを十把一絡げにして震災から一〇年を以て一つの区切りとか節目とかなどとはとても言えないわけであるが、一方で一〇年という時点で何がどこまで進んだのか、あるいは進んでいないのかを一旦チェックしてみるのは、その先の復興の進め方を考えるのに役立つこともあるかもしれない。恐らく今後、「震災一〇年」という括りで震災のことが様々に報じられていくことと思うが、それらの報道はそうした目線で見たいと思う。

「東北復興」紙は、この一〇〇号を以て、タイトルも新たに今後にも刊行されていくと聞いている。

毎度遅筆で、砂越編集長には迷惑を掛け続けているが、及ばずながら私も引き続きお付き合いさせていただければと思っている。

振り返れば毎回毎回、月の初めは、「今月は何を書こうか」と頭を捻り続けているが、これも毎月必ず東北について考える機会を与えていただいている、と思えばありがたい限りである。こういう機会でもない

と、日々目の前のことに流され、東北の来し方行く末について考えることがついに後回しになってしまったりする。これからは東北について考え続ける一つの機会として私自身、大いに活用させていきたいと思います。

安倍首相の辞任

さて、安倍晋三首相が八月二八日、突如辞任を表明した。持病の難病、潰瘍性大腸炎の悪化に伴うものとのことである。安倍首相は第二次安倍内閣が発足して以来、七年八九月の長きに亘って、首相の任を務めた。首相通算在職日数も連続在職日数も我が国の憲政史上最長であるそうである。

論調査ですら、第二次安倍政権については、七一パーセントが「評価する」と答え、「評価しない」の二八パーセントを大きく上回ったそうである。

この結果から見ると、賛否が分かると言うより、かなりの割合の人はこの七年八九月についてはある程度以上評価しているようである。確かに、安倍氏が二度目に首相に就任するまで、ほぼ一年ごとに首相が交代していた状況を鑑みれば、七年八九月の間首相の職を務められたのは、そうした大多数の支持があつたことであろう。

ちなみに、この七年八九月という期間、日本の首相の中では最長だが、欧米から見るとそれほど長いわけではない。アメリカでは大統領を二期務めれば八年、ドイツのメルケル首相は既に二二年首相の座にある。

安倍首相の功績として 挙げたい「再チャレンジ」

よく知られるように、安倍首相は一度首相の座を辞している。一度首相を辞任した人が再び首相に返り咲いたのは、戦後では吉田茂に次いで二人目だそうである。安倍首相の功績についてはいろいろと論じられてはいるが、私がその功績として挙げたいのは、「再チャレンジ」を身を以て示したことである。

前に首相に就任した第一次安倍内閣の際、安倍首相は「一度事業活動や起業などで失敗した人が、何度でも挑戦できること、また挑戦できる社会」の実現を訴えた。その背景にはバブル崩壊後の就職氷河期に就職できなかつた多くの若年層の存在があつた。

「フリーター」や「ニート」といった言葉が流行つたのもこの頃のことだ。生活基盤が不安定なまま歳を重ねていく若者が多いことに対して、安倍首相は「再チャレンジ」が可能な社会の実現を目指し、「再チャレンジ担当大臣」を置いた。しかしその後、およそ一年で安倍首相が辞任したため、この「再チャレンジ」に関する政策はそのまま宙に浮いた形となつてしまった。

それまでの日本は、欧米などと違って、一旦失敗したり挫折したりするとやり直しができない社会と言われていた。安倍首相が「再チャレンジ」を打ち出した頃も、就職活動の失敗を理由にした若者の自殺が増加していた。そうした中で二〇〇七年の参議院議員選挙で大敗し、自身が抱えた難病、潰瘍性大腸炎の症状の悪化に伴って、志半ばにして辞任を余儀なくされたことは、安倍首相にもさぞや大きな挫折感をもたらしたに違いない。それも一国の頂点からの挫折という事で、それは文字通り天から地へという落差を伴つたものだったろう。

出馬が遅れたことや、五年前の首相辞任でついたマインスのイメージから、安倍氏の当選は到底不可能と見られていた。しかし、麻生派と高村派が相次いで支持を表明したことから流れを率いていた麻生太郎氏と高村正彦氏が即安倍氏支持を打ち出したのは、そうした安倍氏の再起に向けた努力を見ていればこそのことだ。安倍氏は決して諦めず、選挙戦の末、自民党総裁に再選された。一度辞任した総裁が再選されるのは自民党としても史上初のことだったそうである。

そして、その後行われた衆議院議員選挙で大勝して民主党から政権を奪還し、再度首相の座に復帰したのである。当初打ち出した「再チャレンジ」の施策は自らの辞任で実を結ばなかつたが、諦めなければ「再チャレンジ」が可能なのだということを、自分自身の姿勢で雄弁に訴えたわけである。この姿勢そのものが、病気を始め、様々な逆境にあえぐ人をこの上なく勇気づけたのではないかと思う。どんな状況に陥っても、「諦めない人だけがその先に進むのだ」ということを、我が身を以て如実に示したと言える。

運や偶然でもう一度首相になることなど不可能である。その裏にはやはり相当の努力、研鑽があつたようである。

諦めない人だけがその先に進める

辞任直後の周囲の反応は、安倍氏にとっては相当厳しいものだったようである。東京駅で新幹線を待っていて罵声を浴びせられたり、飛行機に乗っていて嫌味を言われたりということもあつたようである。事実、安倍氏の秘書はその頃のことを「一億人全員を敵に回したような弧絶感だった」と振り返っている。

その子孫で、その四代目に当たるそうである。そう聞いても正直、当の東北人である私から見ると、安倍首相はあまり「同郷の人」という感じはしないのだが、安倍首相本人は自らのルーツである東北には殊の外親近感を抱いていたようである。安倍宗任の本拠とされる「鳥海柵」(とのみ)の「跡」が国の史跡に指定された際には大いに喜んで、史跡のある金ケ崎町に自ら祝電を送つたそうである。

安倍首相は、二度目に首相の座に就いて以降、施政方針演説では必ず、「東北の復興なくして、日本の再生なし」と言つてくれた。その言葉の裏にも実は、こうした東北に対する並々ならぬ思い入れがあつたのかもしれない。さらに言えば、この上ない挫折から再起したその原動力は、有史以来大きな自然災害や戦いで何度も蹂躪されたこの東北の地で、その度に再び立ち上がってきたかつての東北の人たちとも共通するものだったのかもしれない、とも考える。

ちなみに、安倍宗任は、東北の人なら誰でも知っている、奥六郡(岩手県の内陸南部の六つの郡)の俘囚(ふしゅう、降伏した蝦夷)の長である。前九年の役では、源氏を相手に二二年に亘って戦い続けたくらいに富強を誇つた。世界遺産となつた平泉を築いた奥州藤原氏初代清衡(きよひら)の父、藤原経清(ふじわらのつねきよ)とは義理の兄弟である。

より正確には、安倍首相は、貞任の弟で、最後に安倍一族が滅ぼされたその前九年の役の折に投降し、捕虜となつて西国に流された安倍宗任(あべのむねと

う)の子孫で、その四代目に当たるそうである。そう聞いても正直、当の東北人である私から見ると、安倍首相はあまり「同郷の人」という感じはしないのだが、安倍首相本人は自らのルーツである東北には殊の外親近感を抱いていたようである。安倍宗任の本拠とされる「鳥海柵」(とのみ)の「跡」が国の史跡に指定された際には大いに喜んで、史跡のある金ケ崎町に自ら祝電を送つたそうである。

安倍首相は、二度目に首相の座に就いて以降、施政方針演説では必ず、「東北の復興なくして、日本の再生なし」と言つてくれた。その言葉の裏にも実は、こうした東北に対する並々ならぬ思い入れがあつたのかもしれない。さらに言えば、この上ない挫折から再起したその原動力は、有史以来大きな自然災害や戦いで何度も蹂躪されたこの東北の地で、その度に再び立ち上がってきたかつての東北の人たちとも共通するものだったのかもしれない、とも考える。

ちなみに、安倍宗任は、東北の人なら誰でも知っている、奥六郡(岩手県の内陸南部の六つの郡)の俘囚(ふしゅう、降伏した蝦夷)の長である。前九年の役では、源氏を相手に二二年に亘って戦い続けたくらいに富強を誇つた。世界遺産となつた平泉を築いた奥州藤原氏初代清衡(きよひら)の父、藤原経清(ふじわらのつねきよ)とは義理の兄弟である。

より正確には、安倍首相は、貞任の弟で、最後に安倍一族が滅ぼされたその前九年の役の折に投降し、捕虜となつて西国に流された安倍宗任(あべのむねと

う)の子孫で、その四代目に当たるそうである。そう聞いても正直、当の東北人である私から見ると、安倍首相はあまり「同郷の人」という感じはしないのだが、安倍首相本人は自らのルーツである東北には殊の外親近感を抱いていたようである。安倍宗任の本拠とされる「鳥海柵」(とのみ)の「跡」が国の史跡に指定された際には大いに喜んで、史跡のある金ケ崎町に自ら祝電を送つたそうである。

安倍首相は、二度目に首相の座に就いて以降、施政方針演説では必ず、「東北の復興なくして、日本の再生なし」と言つてくれた。その言葉の裏にも実は、こうした東北に対する並々ならぬ思い入れがあつたのかもしれない。さらに言えば、この上ない挫折から再起したその原動力は、有史以来大きな自然災害や戦いで何度も蹂躪されたこの東北の地で、その度に再び立ち上がってきたかつての東北の人たちとも共通するものだったのかもしれない、とも考える。

ちなみに、安倍宗任は、東北の人なら誰でも知っている、奥六郡(岩手県の内陸南部の六つの郡)の俘囚(ふしゅう、降伏した蝦夷)の長である。前九年の役では、源氏を相手に二二年に亘って戦い続けたくらいに富強を誇つた。世界遺産となつた平泉を築いた奥州藤原氏初代清衡(きよひら)の父、藤原経清(ふじわらのつねきよ)とは義理の兄弟である。

より正確には、安倍首相は、貞任の弟で、最後に安倍一族が滅ぼされたその前九年の役の折に投降し、捕虜となつて西国に流された安倍宗任(あべのむねと

執筆者紹介

大友浩平
(おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
<http://blog.livedoor.jp/anagnasi/>



Facebook
<https://www.facebook.com/kouhei.ootomo>



シラサギ



六角牛神社



発芽



コスモス

シリーズ 遠野の自然

「遠野の白露」

遠野 1000 景より

ここ半年以上、コロナ騒ぎで、外出して景色をじっくりと眺めることもめつたになくなり、季節の移り変わりにすっかり鈍感になってしまいました。

そして気が付いたら、春が過ぎ、夏も過ぎて、秋の気配が忍び寄ってきているのを感じて驚くこの頃です。

また一体この半年間何をしていたのだろうと、大きな忘れ物をしたような妙な気分になります。

日本人は長い間、周囲の自然の変化とともに暮らしてきたのが、突然遮断されて、「大きな欠落」を抱え込んだように感じるのですが、遠野の景色、動物、植物を見ると「欠落」を取り返した気分になりとても安心します。



百万遍石塔



親子連れとカモシカ



神様トンボ と、言うらしい



ソバ畑

無頼派の毒舌にぶつた 斬られた東北の事

人がよく言われるところの「多感な十代」に傾倒する文学というのは、誰しも必ずあるものなのだろうか。

私の場合、実は小説というものが決して得意ではなく、SF小説や江戸川乱歩などの推理ものを楽しむくらいで、漱石も鴎外もろくに読まず太宰治も三島由紀夫も村上春樹も興味が無いのだった。魅かれた作家を見れば、その人がどういう性格で、どのような過去を持っていた人物であるかわかるのかも知れない。敗戦直後の混乱の中にある日本人の心に、「正しく墮落せよ。」と衝撃的な言葉を投げかけた文芸雑誌の一記事『墮落論』、その著者であ



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始めると東北好きである。

る坂口安吾に、その書かれた年から四十年の時を越えて魅かれた私とは、どのような少年だったのだろうか。戦争に負けたから墮落するのではない。帰還した勇士は闇屋となり、未亡人には新しい男ができる。人間とは元来、そのようなものであり、政治や因習は彼らを正しく導き救おうとする

が、他者からの借り物の幸福で、人間が本当に救われる事はない。自らの美、自らの秩序に気づくには、各々が墮ちるべくして墮ちるしかない、そこから自身自身を発見する他に、本当に救われる道はないのだ。私は多分におかしな高校生で、田舎に絶望し理想郷を夢想しては家出を繰り返して、学校では落第してどん底に沈むという極端なる呆れた問題児であった。自覚はなかったが、自ら墮ちた状況を客観的に捉えて、肯定も否定もせず、他に救いを求める事なく自分なりの「求道」のような心持で這い上がっていったのは、人間の弱さと愚かさを認めながらも、それと相反する強

さや潜在力を信頼する人間愛をその毒舌の中に炸裂させる誠実な文学に打たれた故ではなかっただろうか。と回想するのである。
*
坂口安吾は文学における

戯作性、即ち俗世に歩み寄り、滑稽さや洒落を重視するエンターテインメント性にこだわった小説家として知られるが、私にはまずエッセー、随筆という文芸の面白さを教えてくれた作家であった。『日本文化私観』『青春論』『デカダン文学論』などの随筆、『白痴』『桜の森の満開の下』などの小説でむきだしの人間の姿を追究し、時代の寵児と称され一躍流行作家となった安吾は、太宰治・織田作之助らとともに新戯作派(無頼派)の一翼と見做される。

小説においては豪放な装いながらも繊細で不安定な性格が災いして未完の作品が多い一方で、社会批評・人間批評では鋭い観察眼と軽妙な筆を揮い、また歴史研究においては後年の「作家による歴史探訪・考察」というスタイルの嚆矢ともいべき画期的にして情熱的なシリーズを遺したのである。

囲碁・将棋を愛した事でも知られるように、頭脳を駆使した勝負事に長け、小説でも推理物、そして戦国武将の駆け引きを主とした歴史物を得意とした。信長・秀吉・家康関連は特に関心が高く、秀吉の参謀ながらその野心を彼に警戒された事で知られる黒田如水を取材した『二流の人』が有名である。秀吉や家康といった成功者・天下人を扱った作品はどれも未完に終わったが、興味深い事に優れ

た策士ながら時流を見誤り、天下取りに失敗した如水の物語は見事完結させている。そんな安吾が追究した、もう一人の一癖二癖ある戦国武将に関する随筆が、実はこの東北の一都市・地方に小さくもインパクトを与え今も物議を醸す起爆剤として屹立している。それが『安吾新日本地理』伊達政宗の城へ乗り込む』である。現代を生きる私達にとつて、政宗といえど一九八四年の『三田大河ドラマ』「独眼竜政宗」が最も強烈に思い浮かぶが、それ以前にも戦前の小説やサイレント映画の時代から幾度も題材とされてきた人物である。

さて、実は坂口安吾という、仙台においては『安吾新日本地理』の書き振りによって相当に嫌われてきた事も有名であるらしい。何しろ建前などという文字が辞書にないかの如き毒舌のエッセイストとして鳴らす男である。問題の一部を本文からいくつか抜粋してみよう。

「(仙台について) 大阪や江戸に比べて、地点の選び方が田舎豪傑的であり、近代性が低いのである。」
「いつも後手後手と気がついた男で、それで生涯冷汗をかいていたのが政宗さ。」
「信長に似せようという心掛けは上出来であったが、同じように信長の方法を踏んだ秀吉が、新時代に即応して変化すべき事を心得て

いたに反して、政宗には、それが無い。バカの一ツ覚えである。」
「彼が必死に全力を尽くしたのは支倉渡船の方ではなくて、そのモミケシ、後始末の方なのさ。」

とにかく、目立つのがしつこい程の「田舎豪傑」というフレーズの連呼である。中央の天下人が成功した本質を見通せず、形ばかり真似している田舎者は滑稽だという訳で、東北一の都会である郷土とその礎を築いた粹人・政宗を貶められた仙台人が「二度と仙台の地を足踏みさせな」と怒り狂ったのも無理からぬ事かと思われる。

しかし、黒田如水の件でもわかる通り、安吾の筆が唸るのは要領の良い成功者についてではなく、不器用且つオッチョコチョイに、人生を駆けまわった敗北者について語る時であった。つまり、彼は如水のような、政宗のような人間が好きなのだ。やはり弱さ・愚かさを持ちながらも戦国の世を駆け抜けた男への愛着と畏れ。それに相反するかのような挑発的な言葉は、むしろ戦う文士としての、彼一流の礼儀なのだろうか。だとすれば、仙台人が安吾の「挑戦」に痛いところを突かれたといつて、返す言葉もないのはいかなるものか? 例えば、仙台城(青葉城)の建設地や拠点都市

いて一矢を報いる事はできないだろうか。
「政宗も本丸の所在地がテツペンすぎるのを新発見して(中略)築城の第一候補地は石巻の日和山であったなどと云い出したのは、それから後の事だろう。」

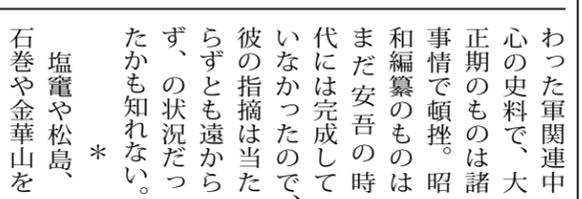
石巻第一候補説については安吾自身が真偽を疑っているのだが、実は仙台城築城直後に慶長三陸地震が起きており、東日本大震災時同様、石巻でも甚大な被害があった事がわかっている。それより以前に、ここが大津波と縁の深い土地柄である事が知られていたとすれば、石巻第一候補を後から語ったという事がまずあり得ないだけでなく、都市や城を仙台の地に築いた事を後悔したという話自体が疑わしくなるのではないか。そもそも、仙台城が築かれた青葉山には鎌倉時代から数百年に渡りこの地を治めたと伝わる国分氏の城があった。この氏族には謎が多く、政宗自ら滅ぼしながらその一族を受け入れて仙台に国分町の名を残させた事、また後の仙台東照宮参道で東西に分けられた町割り、東側が過去国分氏がこの地に敷いた町割りの名残りであり、政宗が第二の城として晩年住んだ若林城もまたその中にあった事など、伊達と国分の関わりにはまだよくわからないところがあるのだ。

そして多くの人が仙台城に対して思う事を、安吾もまた率直に書いている。
「(青葉山のような) 途方もない天険を選んだ以上は大天守閣を造るのが当たり前さ。」
果たして、本当にそうだったのか。天下人・徳川家康に遠慮して、その目を恐れて天守閣を建てなかったとは昔から言われた事だが、近年はむしろ権威誇示の産物である天守などは政宗に不要であつて、時代は対上杉の為の実践用の城を依然必要としており、天険の上にあつた国分氏の遺産の改築は極めて合理的だったなど、いずれも政宗の感覚の確かさを裏付ける説の方が有力になっているのだ。

しかしまた一方で、安吾が指摘した中に確実に思い当たる、現代にまで通じる仙台宮城、更には東北全体に投げかけられた問題点も認めざるを得ないのである。「生産するもの、学問するもの、自分ではない。自分はブローカーであり、素人下宿である。(中略) なんしろ、これだけの都会で、東北の中心で、三百年も大藩の城下でありながら、市当局でヘンサンした市史というものを持たないのだ。」

現在仙台市には全三十二巻に及ぶ『仙台市史』があり、これだけの規模の市史といふのは全国的にも珍しいと言われるが、これは仙台の歴史を編纂したものとして四度目だという。明治期編纂のものは陸軍が関

わつた軍関連中心の史料で、大正期のものには諸事情で頓挫。昭和編纂のものはまだ安吾の時代には完成して、いなかつたので、彼の指摘は当たらずとも遠からず、の状況だったかも知れない。



天守閣は本当に必要だったか? (仙台市博物館展示の復元模型)

塩竈や松島、石巻や金華山を巡る箇所では、都市を語る際に顕著であつた毒舌は影を潜め、その風土や産業、人情をダイナミックに活写していく。

捕鯨と鯨料理で知られる鮎川については、「近代の大会社の資本が入って漁法にも運営にも計画された設計がある」事から石巻のような昔ながらの漁港に見られるような因習的な暗さが無いとし、仙台をも引き合いに出し比較して「東北は精神的に一つの鎖国状態なんだね」と喝破してみせる。

「仙台や石巻には、東京の風も日本の風も仙台的に歪んで黒ずんで吹いてるだけさ。政宗という田舎豪傑の目の届かない悲しい風と同じ風が。」
安吾が一貫して本文で主張し訴えているのは、実は東北の「近代化」なのではないか、と思われてくる。「戦火で焼ける前の仙台

は新しい大通りを新設し、(中略) 相当な明るい街に復興しつつある。」
彼がこう書いた通り、確かにその後の仙台は目覚ましい発展を遂げた。だが、その地域性には未だに安吾が痛烈に批判した「ブローカー」という側面、即ち自らは何も生み出さず流通に終始し、その恩恵を貪る事のみを徹する。故に文化は育たず、人材が東京圏に流出し続けるといふ都市・地域の存続にすら関わる重要な問題点が内在し続けてはいないだろうか。

戦後の、安吾が愛した近代化は東北の何を救い、何を奪ったのか。そしてこれから東北を変えるべき近代化とは何なのか。中央からの借り物の幸福を捨て、今一度「墮ちるべく墮ちる」時を東北は迎えねばならぬのかも知れない。

「戦火で焼ける前の仙台は知らないが、戦後の仙台

東北再興はけっして夢ではない 東京一極集中解消⇒地方分権推進⇒東北再興への近道

昔からの東京一極集中は幻影にすぎない!

最近、地方創生や国の機関の地方移転が話題となる機会が増えてきた。ある大企業の本社の地方移転も話題となったばかりである。

確かに、何もかもが、狭い東京エリアに集中する流れと、それによって出来上がった構造はだれが見ても異常である。

東京圏の異様に高い土地や住宅。通勤地獄、狭い地域に密集しての息苦しさは耐え難いものがある。

また最近では、企業も人も、何が何でも東京に居なければならぬということもなくなってきた。

さらに最近では、東京圏と地方の質的な賃金格差



東京は人口都道府県ランク5位!

人口日本一になったことのある都道府県					
1位の年	都道府県名	1位当時の人口 (1位になった初年度の人口)	1位の年	都道府県名	1位当時の人口 (1位になった初年度の人口)
1872	広島県	91万9047人	1884~86※	大阪府	163万2800人
1873	愛知県	121万7444人	1887~96	新潟県	165万4000人
1874~76	新潟県	136万8782人	1897~1944	東京府 (1943年から東京都)	176万2100人
1877~81	石川県	180万6509人	1945	北海道	351万8389人
1882~83	新潟県	158万1168人	1946~	東京都	418万3072人

※1886年は1月1日付と12月31日付の2度調査があった

広島、愛知、新潟、石川、大阪、北海道が1位だった

も大分縮小してきている。それらを考えると、東京圏を脱出しようと思っただけでは、自然な流れである。

加えて、コロナ禍によって、働き方も今後大きく変化していき、東京一極集中の流れはいずれ変化していくだろうと誰もが予測している。

しかし、それはいざ動かそうとすると、巨大な課題として人や企業の前に立ちふさがり、乗り越えがたい印象を国民に植え付けているのも確かである。

東京一極集中がかなり以前から、江戸時代あたりからずっと続いているイメージが、きちんと検証もされずに垂れ流されているせいであろうか。

ところが、下の二つの表を見ると、東京一極集中が

昔からのものではないこと。かなりの驚きとともに理解できる。

十九世紀後半、今からわずか百五十年前の明治時代初めには、人口は地方に分散し、東京に人口が集中してはいなかったことが分かる。

一八七三年、明治六年では、東京の人口は第五位に過ぎない。

人口日本一になった都道府県も変動している

人口日本一になった都道府県の推移を見ると、これも大分変動していることが分かる。

人口調査を開始してからの変化ではあるが、まことに興味深い。

東京を除く人口日本一の顔ぶれは、まずは広島県、

愛知県、新潟県、石川県、大阪府、北海道と並ぶ。

新潟県などは三度も日本一になっている。

そういう思い出すことがある。

全国で一番神社が多い県はどこかというクイズがあったが、それは新潟県ということだったが、人口が多ければ、あちこちから人が流入して、神社も多くなるといえることだろう。

先の敗戦後の産物としての東京一極集中

話を東京に戻そう。敗戦直後の、焼け野原となった日本を救うには、全国一律で満遍なく、産業振興を図るのは時間もかかるし、効率が悪いということ、政府は東京一か所に様々な産業振興要素をかき集めた。

まずは資本。産業誘致。工場誘致。労働人口の集中。急激に増大する人の居住地の整備などで、短期間のうちに、集中的に東京で産業振興を図ったのである。

そしてそれは見事に成功した。敗戦からの奇跡の復興といわれた大勝負に成功したのである。

この点からいえば、戦後の東京一極集中は、政治と経済が一体化して構築した人工物といえる。

人口地方分散は幻想ではない

敗戦後の東京一極集中が人工物であれば、それを逆回転させれば、東京一極集中は解消されるのが道理である。

要は、そうした決断が、政界にも、経済界にもできるかどうかにかかっているのである。

手法はさまざまであろう。ある政治家が言うように、人も企業も地方へ移動を促進するような法改正があればいいのかもしれない。

それを行えば、巨大な内需が発生する。

敗戦後の東京一極集中の逆の現象が短期間で発生するのである。

実現したら、「奇跡」が化するだろう。「奇跡」が

再び起きる可能性があるのである。それが埋もれて眠っているのである。

そうならば、さびれ果てた地方をもう見ずに済む。極度の過疎化で人が住まなくなり、うち捨てられた住居跡を見ずに済むのだ。

だから、けっして夢などではない。

明治維新前後に戻って発想

ここまでくると、地方移転はより現実的に見えてくるのではないかと。

動かしがたい巨大な課題でなくなるのではないかと。だとすれば、東京一極集中後のこともより現実的に考えていく必要がある。

明治時代以前は、全国に「藩」があった。

「藩」はそれぞれに特徴があった。中央政府として

の幕府はあったが、各藩を何もかも規制するような機関ではなかった。

だとすれば、一極集中解消後の地方も同様に、実質的に多様化を図るべきであろう。

経済も、文化も全国一律にすべきではなく、地方の特色を鮮明に打ち出すべきである。

それが無ければ、単に人口を分散させたにすぎない。それでは意味がない。

地方分権も十分に可能

明治政府は、廃藩置県により、各藩に分散していた権限を取り上げ、中央集権体制を強引に作り上げた。

それが今も続いているが、よくよく考えてみると、先進国ではまれな前近代的な

制度である。

例を挙げれば、学校の制服なども中央集権の名残りであり、軍隊の服を模したものである。

あちこちに残るこうした中央集権の遺物を排除し、真の地方分権を実現するには、この中央集権がどんなものであるかを細かに検証すべきである。

東北再興はそこから拓ける

今、いきなり「東北再興」について語りだしたら、多くの人は笑うだろう。実現など出来ない。夢物語にすぎない。

しかし、そうした気運は近づいている。実現のときに慌てないためにも、いまからじっくり考えておくべきである。

埋もれた歴史発掘ドキュメンタリー【鬼がつくった日本刀】の上映(9/26)のお知らせ(宮城県大崎市)

上映会場：宮城県大崎市生涯学習センター
(パレットおおさき) 多目的ホール
(〒989-6136 宮城県大崎市古川穂波三丁目4番20号)
(TEL:0229-91-8611 FAX:0229-91-8264)
上映日時：2020年9月26日(土)

上映開始：11:00
上映時間：約60分
入場料：500円(税込)

全席自由席
DVD - 3月下旬販売開始済
3300円(税込) 送料無料
解説本(カラー) - 9月販売予定

問合せ先：株式会社遊無有
mail: y.s.yumuyu@ozzio.jp